
星月夜

山本爛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星月夜

【Nコード】

N8241D

【作者名】

山本爛

【あらすじ】

一年後に亡くなる人を愛したら、あなたはどうしますか？『俺は涼子がいなくなるのが寂しいから好きだと思っているわけじゃないんだ。涼子とずっと一緒にいたいから好きだと思って、だから辛いんだよ。でも、好きってそういうことだろう？』

第一章（一）

閉館時間が迫った図書館は人気が少なくひっそりと寂しい。師走の夜気がじんわりと辺りを包んでいた。中庭に面した大きなガラス張りの窓には紺青色がぴったりと張り付く。館内には関係者が忙しく走るばたばたという足音だけが響いた。

「ボックス、お願いね」

すれ違いざまに言われた言葉に愛想良く答えた青年は、言葉どおりカウンターの西側に設置された『今日帰ってきた本』コーナーのボックスに向かう。

そこには厚みのある近代科学の本から、可愛らしいねずみが二匹描かれた『おかあさん、あのね』、人気急上昇のお笑いタレントの文芸書まで雑多に置かれている。同じ人間なのに誰かは相対性理論を解き明かそうとし、誰かはねずみの親子に道徳を学び、誰かは芸人の人生に涙する。さまざまな想いを運んで大活躍を終えた本たちがたったひとつのボックスにひしめきあっているのを見て香坂ははあっとため息をついた。

それらの本を台車に乗せて今から各本棚に返しに行く。これが地味にだるかった。

どっさりと重くなった台車がゴロゴロと音をたてるのを聞きながら、男は、もう半年と一週間が経ったのだ、と考えた。

司書の資格を卒業と同時に取得したときは、嬉しくてたまらなかった。大学の講義をいくつも掛け持ちし、何度も落第しながらも、取得したのだ。未来が拓けた、と思ったものだ。思えばあの時が一

番、輝いていたかもしれない。大学で司書の求人情報を集め、一番条件の良かったのがこの図書館だった。はじめてこの土地に来た時、ゴロゴロと転がしていたスーツケースが時折アスファルトの道に跳ねながら、男は役所までの大通りを浮き足だつて歩いていった。空は雨を降らすのをやめて、水色がかった白色をまとつていった。通りの途中にあつた花屋の店先に置かれた紫陽花の花。楕円型に溜まつた雫が、葉脈を辿り、葉先から可愛らしく垂れていた。役所を訪ね、そこの役員がぶっきらぼうに勧めた地元から少しだけ離れたこの図書館に決定したのはそんな時節だった。

いつから、こうなつてしまつたんだろうか。男はまたひとつ考える。はじめは単純な配架作業も、体力のいる仕事だったが、何もかも嬉しく誇らしかつた。ただ、季節が夏を迎えたところに、図書館の急な路線変更があつた。以前までは資格を有したもののしか採用しなかつたが、人手が足りず、資格の有無関係なしにアルバイト感覚で人を雇うようになったのだ。求人をつけてから程なく、何にも知らなさそうな女がこの図書館にやってきた。同じ作業を難なく進める彼女を見て、男は焦つた。話を聞けば、勉強なんてしたことがないといつてあははと笑つた。何かがその醜い笑顔に壊されていつたようだった。

以来、本当は研修先なのだけど、香坂は「バイト先」と知人に語る。これは、表現上は偽りでも、その言葉が指し示す彼の心情の変化をも含めた広い意味で実質上は間違いでない。

一週間ほど前、彼は、六畳ほどの黒と白を基調とした彼らしい小綺麗なシンプルな部屋でトントンと腰を叩きながら「転職や辞職は入社半年の頃に多い。」と禿げたコメンテーターが偉そうに語るのをブラウン管越しに見た。彼は、奴の不躰な統計に入りかねないことにわずかな抵抗を覚え、今をぎりぎり乗り切っている。

館内を一通り回り、随分と軽くなつた台車をコロコロと言わせ、今度は視聴覚室へと続く通りにあるガラス張りの窓に着いた。日本庭園風に造られた中庭に面してそびえる大きな窓に沿うように、木製

の赤いクッションが取り付けられた椅子がいくつか並んでいる。台車をそのままに、窓の端に設けられた大げさに上品なカーテンに手を伸ばした。ああ、今日もまたいたんだ。

「カーテン、下ろしますね」

椅子の一角に座る女性に確認するように言った。彼女ははつと顔を上げて、カーテンを紐解く男に目をやった。

「もう閉館ですか」

「そうですね。後十五分ほどかな」

彼女はいつもここにいる。香坂がそのことに気づいたのは二ヶ月ほど前。まだまだ夕方に射し込む西日がきつく茹だるような日々も続いているというのに近所の学生たちはぼつぼつと見た目にも暑苦しい深い色合いのブレザーを着だしていた。確かそんなアンバランスな季節だった。

相変わらず文庫の整理に勤んでいた香坂がふつと顔を向けた先に、辺りを包む夕焼けの色に染まって熱心に本を読む彼女があった。その少しだけ傾いて髪がかかった横顔がとても美麗であったことを覚えてる。

以来彼女を見かけない日はほとんどない。

「貸し出ししましょうか」

読みかけの本を手に持った彼女に香坂は尋ねた。本当は、いいえ。ということくらい分かっている。きつと明日もまた彼女はここに来てあの本を手取るのだから。ただ初めて聞いたその透き通った女の声をもう一度聞いてみたくなっただけなのは間違いない。

彼女は彼女らしいか細い声で「いいえ。」と答えた。

翌日も翌々日も図書館の休館日以外、彼女は必ずやってきた。あの日以来、たまに「こんにちは」と挨拶をし、閉館前には「カーテン

おろしますよ」という小さなやりとりだけが行われていた。

香坂は、彼女のすうっと通った鼻筋や白い肌、ちよっとだけ釣りあがった丸い目は甘さを強調しすぎず爽やかに綺麗だと思ったが、どうして毎日図書館にやって来るのかを訝しくも思った。

彼女は香坂の中で単なる図書館の一利用者だけではなくっていったが、まだ彼は、名前も歳も何も知らない女に情熱を感じるほどに、この悶々とした生活に余裕を見つけ、見切りをつけられる歳には至っていないかつたし、もう簡単に恋に落ちられるほどには若くなかつた。

それでも彼女の透き通った声の耳触りの心地よさはとても良いと感じていた。

「貸し出しですか。」

カウンターの一角にある貸し出し所でパソコンと対峙していると、彼女が一冊の本を持って現れた。香坂が意外そうに漏らした言葉を女は、よく理解したようで「明日は来ないんです。」と困ったように笑いながらカードを差し出した。

「そうなんですか。」

香坂もつられて困ったような笑顔を見せて手を伸ばした。

若月涼子

カードには彼女らしい細い字で枠内にしっかりと書かれていた。

カードと本につけられたバーコードを読み取るとパソコンには簡単な利用者の情報が出る。

若月涼子 十九歳

香坂はそれをしっかりと目の端で捉え、パソコンの横に設置された専用の機械からだと下がった返却期日を明記した感熱紙をひき

ちぎり本に挟み込んだ。

「返却期日は一月十六日までになります。ご利用ありがとうございました。」

決められた挨拶、決められた角度のお辞儀を披露すると、女は「あの…」と返した。

ふつと顔を上げると涼子は辺りをきよきよと見渡し「ちよつといいですか。」と言った。香坂は意外に思っ、貸し出しに並ぶ人がいないことを確認しカウンタを出た。

「どうかされました」

「あの… 展覽についてなんですけど…」

「ああ。展覽はまだしないんですよ。展覽っていつでも資料室みたいなもんだけど」

「あ、あの違うんです。あそこは一般利用できないんですか」

涼子は奥の展覽質を指差してまた困ったような笑顔。

「展覽会場としてということですか」

「はい」

「うーん。どうなんだろうなあ。団体の、ですか」

「あたし一人です」

これにはますます困った図書館の展覽室を個人で貸してくださいという要請は今まで受けたことがない。

「ここじゃなんだし、ちよつといいですか」

香坂は涼子を連れて二階に設けられた事務室へ向かった。

「今ちよつと担当の方いないんで俺だけでも話聞いておきます。新人ですけど許してくださいね」

事務室の扉に手を掛けながら香坂は、振り返って言った。

「お願いします。」

ちよこんと挨拶をする涼子の中へ促し、適当なイスに座るように言った。向かい合う形をとって香坂がボールペンをカチツと言わせると何かの合図のように涼子は話し出した。

「若月涼子といます。十九歳です。」

知っています。とは言わずにさらさらとメモを取る。

「展览内容はどのようなものになりそうですか」

「絵を中心に、です」

涼子は絵についてそう言うて語りだした。どういった絵を描いたか、どういうテーマかなどを具に語って聞かせた。随分詳しいような気がして香坂は「あの、すみません。美大生か何かですか」と最前から気になっていたことを聞き出した。

彼女は静かに首を振る。「少し大学へは行きましたけど、やめちゃいました」

「失礼でなければ、どこへ」

「K大です」

「K大って…やめちゃったんですか！？勿体無い！」

大げさに驚く男を見やって涼子は「そうですね」とそんな気もなさそうに、固い表情を浮かべて言った。

「じゃあ、今何をされてますか。」

彼女は静かに首をふる。

「あの、じゃあ…」

何者ですか。と続けるのは気が引けつつ、まさか既婚者じゃないだろうな、と思案している香坂の困り顔を見つめ、涼子はすうっと息を吸う。

「あたしは、学生でも就労者でも主婦でもありません。ただのエイズ患者です。」

しいんつと静まる事務室に驚く男と無表情の女。香坂はこれほどまでに返答に困る言葉を聴いたことが無かった。とはいえ、口を突いて出たのが「はあ」だったのは情けないかもしれない。

すると彼女は途端にっこり笑って「あなたの反応はとても新鮮です」と言った。

猶も驚く香坂を前に涼子は続ける。

「驚きましたか。でも今日日本では四人に一人はそうだと言われているんですから、意外と左利きの方に会う率とそう変わらないはずなんですよ。二十八人学級のクラスのうちの七人だけです。左利きの方が珍しいかもしれないくらいです」

「いや…その」

香坂は思わず左手中指の第一関節に長年連れ添ったふっくらとした塊を見た。

「あたしが汚い女に見えますか」

「そんな…！」

香坂はあの爽やかに美しい女に少しだけ陰りを見た自分を恥じ急いで否定しなければならなかった。

「大丈夫です、遺伝です。」

彼女の大丈夫です、を測りかねて香坂はぐっと黙った。

「あたしはもう慣れっこです、気を使わないでください」

少しだけ口調が柔らかかになっていた。それでも香坂は言葉の接ぎ穂が見当たらずただ目線だけをふよふよと泳がしていた。もう一つ優しくなった口調で涼子が続けた。

「あたしはまだ十九歳ですがもう晩年です。あたしの体は一年後には灰とカケラになります。最期に個展を開かせてくれませんか」

香坂が、とにかく研究員の方に展覽室の利用を掛け合い、分かり次第連絡することを伝えると涼子は「ありがとうございます」と丁寧にお辞儀し去っていった。

研究員の何人かに尋ねたけれど誰もいい顔はしない。ただでさえ人手が足りずに忙しいというのに余計なことをするな、とでも言いたげだ。

しかも「そういうのは市民センターに問い合わせてそちらの方でホールなりなんなり予約してもらわなくちゃ」と、たいそう妥当な意見を言うから香坂はまた困る。

「図書館がそんなことにいちいち対応していたらキリがないわ。それにまだ十九でしょう。これからいくらでも機会はあるわ」

涼子の病気を伝えることは躊躇われた。他人の病気を安易に口にすることは禁忌である、そういう意味では病気も神秘的なものと言えるかもしれない。自分がそれを口にした瞬間、涼子の病気がただの石ころ同然になって地面に落ち、軽々しさを帯びるようなことは避けたかったし、病気を盾に話を押し進める空しさを思うと萎えた。翌日、涼子の言葉どおり彼女は来なかった。翌日も翌々日も涼子のいつもの席は主人を失いぽつんと佇んでいた。

残念な結果を知らせることに後ろめたさを感じていた香坂も、はじめは少しだけほっとしたが、休館日を挟んで次の日もやって来ないことに不安を覚えだした。

利用者データを名前と年齢で検索し、表示された涼子の家の電話番号に何度も何度も掛けるが彼女は一度も出ない。

受話器をカタンと置いたときに、香坂は良くないことがあったのだろつか、とさつと青ざめるしかなかった。

「千裕？」

不安な心持ちで勤務を終え図書館からの帰り道、駅近くのコンビニ付近でふと呼ばれた。

「佳奈……」

「……久しぶりだね」

佳奈は呆然と立ちすくんでいる、当時よりずっと垢抜けて立派なお姉さんになっていたが喋り方はあの時のまま。

「久しぶりだな。」

この女に会いたい、と思っていた時がある。好きだと言って言われて愛し合っていたときがある。でももうそれも過去の事。何にも知らずに能天気でいられたときの事。

「元気にしてた？」

「うん。」

「千裕、今何してるの？」

「図書館でバイト」

「そうなんだ、大変？」

「まあまあかな」

相変わらず質問攻めの佳奈に少しだけ微笑んで言うと、佳奈は「千裕、変わってないね」と嬉しそうにも悲しそうにも取れる顔を見せた。

「千裕、今幸せ？」

「どうだろうな」

「彼女あれから出来た？」

「何人かは。すぐ終わったけどな」

そのあと佳奈はひとしきり喋り続け香坂は懐かしんで聞いていた。

佳奈とは高校のときに出会った。佳奈は、やんちゃ盛りで無茶な仲間を連れ合いながらも一人涼しげで精悍な香坂にありがちな恋心を抱いて、やがて二人はこの歳にありがちな始まり方と終わり方をした。

佳奈との関係を終えてしばらくは香坂も人並みに寂しいと感じ、楽しかったときを思い出したりもした。好きだったんだな、と痛感した瞬間もあった。

けれども少しずつ時間が経ち、色んな世界が開かれ、色んなことを見聞きし考えていくうちに、気にならなくなった。

好きでいなきゃならない、彼女でなければならぬ、という半ば義務化されてしまったこだわりから徐々に離れ、忘れることを自然に受け止められるようになった。

そうして佳奈はすっかりと思い出として焼き付けられ、記憶の奥へと埋没し、以後ほとんど呼び起こされることはなかった。

「千裕も頑張りなね」

「うん。佳奈も」

「いつか飲みに行こうね」

「うん。またな。気をつけるよ」

佳奈は、はいはいと笑顔で駅の中へと去っていった。

このまま帰る気も起こらずコンビニに入ってしまった。バカでいられたあの時と、何かうまくいかない今。どちらも情けなく思われた。雑誌には頭の悪そうなギャルから性格の悪そうな爽やか美人まで色んなやつがにこにこ笑っている。

（あんたほんとに楽しい？）

メイクの域を超えた決め顔のひとりに目を落とし香坂は思った。

辺りはひっそりと暗くかろうじて姿を留めた糸のような月が雲の間におぼろげに浮かんでいた。コンビニの前に設置されたタクシー停留所をぼんやりと見ているとひとりの女性が視界に飛び込んだ。

(あれは…)

コンビニの透明の重い扉を押し開けるとピンポンピンポンという機械的な音と抑揚の無い店員の「ありがとうございましたー」の音が扉から漏れた。

ふと振り向いた女性と目が合った。涼子だった。

「あ…図書館の」

「香坂千裕。言ってなかったね」

「こんばんは」

「あれから何度も電話したんだけど…」

「病院行っていたんです」

「そうなの…心配したよ」

涼子は「すみません」と小さな声で謝りちよつとだけ俯いた。いいはいないで不安だし、いたらいたらで話しづらい。「ダメだったんだ」とは言いづらく少しだけ沈黙が続いたがやっぱりこうしてまた会えてよかったと思いついた。

「良かったらあたしの家きませんか」

「え？」思わず誘いに戸惑ったが「見てほしいものがあるんです」と続ける涼子のなんだか恥ずかしそうな顔に断りの言葉が続くわけもなく香坂は黙ってうなずいた。

駅を出て踏み切りをわたり細い路地を通っていくと小ぢんまりとしたアパートについた。

「ここです」

涼子の案内に従い部屋に入ると中は閑散として衣食住しか感じられないようだった。

お茶やら何やら来客用のひと段落を終え、小さな白色のテーブルを前に居直した香坂は話し出した。

「で、あの本題なんだけど」

「はい」

「俺も色々掛け合って見たんだけど、その、ダメだった」

言えた。

彼女は少し考える風でゆっくりと口を開いた。

「そうでしたか。いろいろ迷惑をかけてすみません」

「いや、でも市民センターに問い合わせれば…」

「いいえ。いいんです。ありがとうございます」

はつきりとした言葉だった。彼女は傷ついたのかもしれない。香坂は何もいえない。

「あたしの病気の話はしましたか」

「いや…できなかつた。したほうが良かったのかな」

涼子はすっかり弱ってしまった香坂を見て、くすつと笑いティークアップの取っ手に手を伸ばした。

「香坂さんは優しい人なんですね」

「優しくなんかいいですよ」

思わずそう言ったが、謙遜ではない。本当に千裕は自分が優しいなどそんな虫唾が走るようなことは、とんと思つてない。どちらかといえば気立てが悪く冷めた方だとすら思う。誰かをひどく恨んだこともないけれど、誰かのために涙を流したことも無い。厭世的になるほど寂しがりやでないけれど、欲望を持つほど生きることに強い人間でもない。

優しい、という高尚な概念を香坂も会得したわけではないが、どの自分の側面を見ても『優しい』とピツタリこなかった。野蛮でなければ優しいのだとすればそうかもしれないが。そんなネガティブなものではないだろう。

「でもじゃあどうしていつもそんなに疲れた顔をしているんですか。」

「疲れた顔？」

少しだけドキツとした。でもまだ触れられて気持ちのいい話ではない。曖昧な返事だけ返しそつとはぐらかした。

「若月さんは図書館が好きですか？」

「ええ。とても。美術関連の本がたくさんありますから」

「館長が好きで、本棚ひとつ分寄贈したんだって。マニアックすぎてあまり誰も近寄らないんだけど」

「そうなんですか。読破しようかしら」

「館長喜ぶよ」

「あと、あたしがいつも座っているところの近くの壁に絵があるじゃないですか」

「あつたかな」

「ゴッホの『星月夜』有名な作品です。もちろん複製。あれが好きなんです」

「俺には分からない世界だね」

「ぜひオタクの世界にきてください」

屈託無く笑う涼子を見ると、本当に病気なのか疑われた。騙されていたんじゃないかとさえ思った。

「で、見せたいものって何？」

「ああ…そうですよね。こちらに来てください」

涼子はそういって立ち上がり隣の部屋へと香坂を導いた。

「これは…」

思わず息を呑んだ。わずか何畳かほどの部屋に二メートルはあるうかと思われる巨大な絵があった。

「あたしが描きました」

「ひとりで？」

「はい。あたしの生きた証です」

圧巻だった。キャンバスの中では抽象化された何人もの人々が自分の頭やら目やらお腹やらを押さえうずくまったり立ちすくんだり涙を流したりしていた。キャンバスには何色もの色が重ねられ言葉には表現しきれない具合を作り出していた。

「何年も前から少しずつ描いています。誕生日が来ると人を描き加えていくんです。個展ではこれをメインに考えていたんです」

「すごい…」

上手下手の次元にある絵ではないことくらいは絵心のない香坂に

も分かった。

「この絵を人に見せるのははじめてです」

「いいの？俺なんかが一番で」

涼子はふふと笑い「一番は私ですけどね」と呟いた。香坂は微笑む涼子を見つめ「ほんとにすごいね」とゆっくり笑った。

涼子もまたその顔を目に止めると話し出した。

「あたしは、生まれた時から特急列車の切符を左手に持っていただけなんですよ」

「特急列車？」

涼子にはっこり笑い「明日にはきつと分かります」と言った。

帰宅後も香坂は涼子の一言一言と絵を逡巡していた。目を覆い隠しながら指と指の隙間からこちらを見つめ涙を流す女の顔。腹を抱えずくまりおびえる男。

あの絵にたった一人あの狭い部屋で向かい合う涼子を思うと人知れず胸が痛んでいた。

次の日は館内整理日で図書館営業は休みだった。外では十日ぶりの雨が降りしきり館内はじめじめと湿り気を帯びていた。

香坂は日中を本棚整理と図書館の企画予定の割り振りなどで忙しく館内を歩き回っていた。そして見た。視聴覚室へと続く壁の途中の一枚の絵。

「あたしのいつも座っているところの近くの壁に絵があるじゃないですか」

ふつと蘇る涼子の声。

『ゴッホの『星月夜』有名な作品です』

そこには炎のような一本の黒い杉が青暗い空へ伸び、空には渦を巻いた雲が棚引き、大きな月の村を照らす姿が描かれていた。

薄気味悪いようで、見る人によってはもしくは優しくロマンチック

な絵であつた。

星月夜　フィンセント・ファン・ゴッホ

額縁の下にはしっかりと館長の流麗な文字でそう書かれていた。そしてタイトルのほんのわずか下には同じ館長の字体でつらつらと書かれた文字があつた。

夜空の星を見上げているといつも夢心地になるが、それは地図の上で町や村を表す黒い点を見て夢想することに近い。何故、夜空に輝く点にはフランス地図の上の点のように近づくことができないのか不思議に思う。

汽車に乗ってタラスコンやルーアンに行けるならきつと僕らは死に乗って星へ到達するのだろう。つまり死ねば汽車に乗れないのと同様に生きている限りは星にいけないということだ。

蒸気船や乗合馬車や鉄道が地上の交通機関であるように、コレラや肺結核や癌は天上の交通機関であると考えられないでもない。老衰して死ぬのは、歩いていくようなものだろう

『あたしは生まれた時から特急列車の切符を左手に持っていただけなんですよ』

涼子は初めてこれを目にした時、ひっそりと一人あの椅子の上で、何を思ってきたのだろう。香坂は涼子の椅子の後ろ側、ガラス張りの窓にしきりに打ち付ける雨粒が、ぶつかった衝撃でつーっと下へ下へと伝う様子をぼんやりと眺めていた。

久しぶりの元彼は想像以上にかっこよくなっていた。落ち着きが少し出たのかもしれない。髪も黒に近い深い茶色にして、千尋の雰囲気によく似合う。

佳奈は駅の改札へ向かいながらドクドクとやたらにうるさい心臓を押しえた。

(千裕、頑張ってたんだ…彼女もいたんだ)

すべての青春を捧げたといつていい男はやはり他の誰とも違う気持ちになる。佳奈ももちろん例外ではなかった。

千裕よりも自分の気持ちが大ききことは昔から気づいていた。不満だった。千裕は愛されているから自分を好きなのだ、自分が去れば追いかけてもせず忘れていくのだと思うと不安でたまらず悲しかった。

それでも千裕の隣にいることは誇らしく、にっこり笑って手を伸ばし抱きすくめる彼の腕も背中も匂いも、彼を作る全てが愛しくて仕方なかった。

そういった安心や喜びと不満や不安との緊張状態は佳奈に千裕から離れられない悪性の中毒を起こさせた。

千裕はやがて佳奈の重たさを疎んじるようになった。そうして理不尽な言葉を吐き捨て、それを正当化するような自分にイラ立ち、ただ謝り千裕にしがみつくだけの佳奈にいつそう腹が立った。

そういった悪循環は千裕を精神的に疲れさせ、千裕は無気力になり、「別れよう」と言うまでに時間はかからなかった。

佳奈も千裕の勝手なふるまいに一時は憎み、忘れることに積極的になったこともあったが、忘れよう忘れようと考えれば考えるほど

千裕を忘れることにならなかった。結局は冷静さが備わるにつれて千裕を忘れなければなら名い必要性を感じなくなり、今でも大事な人に変わりがない。

外は久しぶりの雨が降っていた。佳奈は部屋でひとり携帯をしつかりと握り締め空にもくもくと広がる雨雲を見つめていた。

(バイト中かな…)

メールを送って随分経つ。佳奈はそういえば昔からメールの返事は遅くていちいち不安だった、と思った。

風が雨を乗せてごうごうと吼えていた。

「その絵はゴツホがオーヴェールに赴く前、サン＝レミの精神病院で描かれたものだよ」

深いしわがれた声にはっとし振り向くとひとりの老いた男がいた。

「館長」

驚いて居直すと男はそつと笑う。

「この糸杉をゴツホは何枚も描いている。サン＝レミにあった精神病院は比較的優しい施設でね、ゴツホにアトリエとして余った部屋を使うことを容認していたんだ。その部屋の窓から見えたのがこの糸杉だったと言われている。」

「精神病院ですか？」

「ああ。ゴツホは寂しがりやだった。アカデミックな絵を憎む未来の印象派の画家たちと一緒に暮らしたかったんだ。有名な十四本の『ひまわり』は彼らを表しているんだよ。結局はゴーギャンしかゴツホを訪れなかったがね。でもゴツホはうれしくてたまらなかった。大好きな黄色を家中に縫ったよ。でも個性の強い二人が小さな部屋に四六時中いることなんて所詮不可能だった。絵の様も百八十度異なっていたからね。ゴーギャンは出て行った。敬愛するゴーギャンとの生活に破れ失意に墮ちたゴツホはゴーギャンを追いかけナ

イフで襲ったんだ。ゴーギャンは鋭い冷たい目で睨んだよ。そうしてすすごと自宅へ帰ったゴツホは自分の左耳を切ったんだ。地域の住人に恐れられてゴツホは精神病院へと送られたよ。」

「耳を切る……」

「狂った男だと思ukai?」

「いたずらっぽく男は笑った。」

「ゴツホは優しい男だよ。この文章は弟のテオに宛てたものだ。」
「老いた男は『星月夜』と書かれたタイトルの下の長い文章を指差した。」

「僕はゴツホの言葉のなかでもこれが特別に好きでね。ゴツホの言葉は深くて美しいよ。聞いているだけで音楽のように気持ちよくなるんだ。」

「ほんとに彼は、精神病だったんですか?」

「分からないんだ。これだけの文章と絵を描くんだから精神異常とは思えないよね。でもよく発作は起こしていたようで絵どころではないときもあったそうだよ。」

「彼はじゃあその発作で亡くなったんですか?」

「ゴツホの残した言葉と、照らし合わせ彼もまた病気のようなもので亡くなったのだらうと思ったのだ。」

「いや、自殺だよ」

「自殺?」

「ピストルで心臓を。弾丸は心臓のやや下で止まって即死は免れがたがね。一時は持ち直したが、二日後に駆けつけた弟の腕の中で『泣かないでくれ。みんなの事を思ってたんだ』と語って亡くなったそうだよ」

「みんなのため?」

「そう。みんなのため、だ。悲しい話だ。決してそれはみんなのためなんかにならなかったのだから」

「どういうことですか?」

男は首を傾げた香坂をじっと見つめ口を開いた。

「この話はまた今度だよ。ゴッホについてだと僕はいつまでも喋ってしまふ。そろそろ働かなくてはな。」

そういつて穏やか顔の男はいつそう穏やかな顔をした。

「人には君が思うよりもずっと驚くほどの孤独や不安があるんだよ。僕たちには感じていい孤独とそうでないのがある。その粋を超えてしまつと人間は吸い込まれるように、あつという間に消えてしまふ。」

ただただ綺麗な目をしている青年を前に男はそう言った、

「大事な人の孤独に敏感になりなさい。」

館長との話を負え、残った仕事を片付けるとすっかり夜になっていた。

(メール…)

着替えを済ましランプが点滅する携帯を開くと一通のメールが来ていた。

佳奈です。昨日は久々に顔を見れて嬉しかった！今度ほんちに飲みに行こうね。開いてる日とかある？

香坂は読み終えると、いつもの癖のように、開いた携帯を折り曲げてポケットへと押し込んだ。

雨は少しだけ止み代わりに辺りは暗くなって佳奈の部屋にひんやりとした寂しさを連れ込んだ。

ごめん忙しかった。いつでもいいよ！

約半日待つて返ってきたメールはたったの二文だった。いつでもいいよの後に「！」がなければ相当落ち込んでいるところだ。

(こんなもんだな…)

佳奈は自分を励まし返事を打った。

お疲れ様。じゃあ再来週くらいの日曜でもいい？七時に前会ったとこ。

少しばかり簡素になったメールを送ると返事は意外にも早かった。
いいよ。楽しみー

相変わらずの二文。それでもやっぱり千裕はずるいと思う佳奈だった。

(四)

四

あれ以来香坂は館長に気に入られ、二人は打ち解けた仲になった。今は恒例の館長の呼び出しに答えている最中だった。

(出世街道には悪くないんだけど…)

そう思いつつも、やはり香坂にも仕事がある。

「館長。香坂です」

館長はにっこりと笑い温かい部屋の中へ入るように促した。

「俺にも仕事があるんすよ。藤原さんにいやな顔されちゃいます」

藤原さんとは香坂がもつとも苦手とする先輩のおばちゃんだ。

「仕事？」

いたずらっぽい顔をして男は香坂を見た。

「そうですね。貸し出しとか、発注とか」

「棚整理とかかい？」

むうつとなる香坂を笑い

「僕は君の上司なんだよ。君が侍で僕は城主ってとこだな。藤原

さんには怒られなさい」

と続けた。

「ひょうきんな殿様ですな」

呆れた侍は不満げに息をついた。くつくつと笑う男を見て香坂はふと尋ねてみた。

「館長。藤原さんとの人間関係崩壊の代わりにお願いしますあります。」

「ひょうきんな殿様はきよとんとした顔をして香坂を見た。」

「展示室見てもいいですか？」

涼子のごとはずつと気にかかっていた。昨晚だって自分の部屋で

昔の女を相手にメールを打ちながら、彼女にはこういった自分が当たり前としてしまうような日常のやりとりをどう感じて、生きているのだろうかと思ってみたばかりだ。

それに、実を言えば香坂は展示室を見たことがない。最初の案内のときに適当な説明を受けたことがあったが中の様子をじっくりと見たことはなかった。

『いいえ。いいんです。』

彼女のいつにない強い言葉。圧倒的な絵の存在。たった一年の命。普通に考えれば、個展を開こうとすればそれなりの施設に連絡するはずだ。だが彼女はあえて図書館を選んだ。彼女が選んだ展示室を一度じっくり見ておきたかった。

「展示室…？…別に、構わんが」

そう言って館長は鍵を取り出し香坂に手渡した。

香坂は鍵を握り締め階段をくだった。カウンターで忙しく歩き回る藤原さんを確認しそつと廊下を渡り展示室へ急いだ。

鍵を差込コンサートホールのような重い扉を開けると中は真っ暗だった。

入って右側の壁に手を伝うと端の方で指が突起物に触れた。丸みを帯びた出っ張りをぐつと押し込むと部屋はぱつと明るくなる。中は小ぢんまりとしていて、ショーケースがいくらか壁に沿って置かれた簡素なものだった。電灯と壁の色は温かみがあつて良く思われたがそれ以外は至って普通の、それどころかいくらか他の施設には劣るかもしれないかった。

でも、

(似てる…)

香坂はふと感じた。

(あの部屋に似てる)

涼子の何もない部屋。絵を描くこと以外を忘れられたような小さな部屋。涼子の絵はある一種の空間を創る。絵が創った空間の中に

涼子の想いが散りばめられているのだ。そうして観客たちの目だけではなくすべての感覚機能に訴えかけ、見るものの心臓をきゅつと驚づかむ。あの絵はスポットライトを浴びるとかえって色褪せてしまふようなものである。涼子はたくさんの人に見せて脚光を浴びたいわけでは決していないのだ。

『最期に個展を開かせてください』
はかない涼子の姿が頭を過ぎった。

香坂は階段を駆け上がった。急いで目の前の扉を開け、鷹揚に座る男に目をやった。「見てきたのかね？いたって普通だろう」

「…お願いがあります。あの部屋を貸してください」
「どうした」

「あの部屋が必要なんです」

事の次第を香坂は話した、涼子の病気のこと。館長は静かに話を聞いていた。

「大体は分かったよ」

まくしたてるように話をし終えた香坂は少し息を乱していた。

「いけませんか…？」

「いけないなんてことはないよ。ただ実際に会ってみたくは思う」

「ありがとうございます」

「まだ決まったわけじゃないんだから礼なんて述べないでくれよ。」

館長は困ったように手をふった。

「でも、難しい話だよ。近くの図書館分室が経営不能になってね。そこに所蔵していた本やらを引き取ることにしたんだ。展示室のスペースを安置所に決定してしまっているんだ。もう少しで役員たちが来るよ」

そう言い終えると男は香坂を伺うように見た。目の前の青年は若々しく、いつになく真剣な鋭い顔をしていた。

第二章（一）

—

涼子はふうつと息をつき今しがた帰っていった男が残したお茶を片付けにかかった。

（緊張した…）

涼子は男の人とほとんど話したことがない。

（ひかれなかったかしら。いきなり家に招待なんかしたりして）病院帰りのひとりはいつも寂しくてたまらない。もう少し部屋を華やかにすれば？と友人に言われたこともあったが、死んだときを思うと荷物は少なくて良いように思った。

（香坂さんを驚かせてばかり）

ふつと涼子は笑った。

同じくらいに若くて、しっかりとした骨付きに少しだけ焼けた肌、鋭い眼光にすつと伸びた高い背、若々しい無造作な流行の髪形は健康そのものだ。

それがさもつまらなそうに図書館勤務をしている彼を最初は憎く思った。疲れているのかと思えばそうかもしれないが涼子には腹立たしくて仕方なかったのだ。

図書館には若くてきらびやかで歳にあつた楽しみを謳歌している様子を感じさせる人が少なかった。学生などが何人かはいいたが、ほとんどもが高齢者か小さな子どもで、何より静かだった。涼子は世間から逃げるように図書館の一隅に自分の世界を創った。

その世界にいつからか現れたひとつの若い影。死が迫るにつれて諦めきっていたはずの涼子の心にも綻びが出だした。そんなに楽しい人生じゃなかった。そんなに生きること頑張れたわけじゃなかった。だけど、だけど、それでも目の前にちらつく健やかさは憎く

て憎くて羨ましくて羨ましくて。触れてみたくてたまらなかった。

『カーテンおろしますね』

ふっとそんな声がして、見上げた。男の顔は疲れているばかりでなく、少しだけ悲しそうにも思えた。

『もう閉館ですか』

彼女はそんなことは分かりきっていたはずだ。館内アナウンスが閉館を告げたばかりなのだから。男は少しだけ不思議そうな顔をして『そうですね。後十五分ほどかな』と言った。男の声は意外にも深くて優しいものだった。

以来、軽い挨拶を交わすようになり思い切って個展の話を持ちかけた。

男は事務室に涼子を案内し事務的な質問をした。美大生か何かですか、と聞かれ有名大学を退学したことを告げると男は驚き勿体無いと騒いだ。

大学は辛かった。何もしないよりは、と思い教師の勧めもあって大学に進学した。進学できたのも、満身に当たり前の恋も出来ず、部活に入って仲間を増やすことも当然叶わず、ただ考えることを疎んで勉強したからだ。

大学の構内には未来溢れる健康的な若者たちがひしめき合っていた。一時の恋を楽しみあって、笑いながら平気で軽々しく男女の関係の深い話をした。

なんで、こいつじゃなくて自分が…

そんな想いに疲れ涼子は大学を静かに去った。別れを惜しむ者もそういなかった。

目の前のエリートそうな就労者は大学生でもない社会人でもない既婚者でもない自分に戸惑った。それはそうだろう。だって、涼子ですら、自分が社会でいう何者に当てはまるのかはいまいち分かってなどない。分かっているのはひとつだけだ。

半ばこの疲れ顔の健康体に八つ当たりする気持ちで涼子は自分が唯一分かる自分の正体を言い放った。

『あたしはただのエイズ患者です。』
予想通り、男の間の抜けた返事にささやかな復習が成功したことを感じた。とても傷ついていたのは自分だったけれど。

翌日には無駄な定期健診がはじまり図書館にはしばらく行けなかった。入院を終えてタクシー停留所の近くで侘しい家に帰ることをためらっているかと再び男と出会った。

男は心配そうな顔で何度も連絡してくれたことを言っていた。

『心配したよ』

だから気づくと家に呼んでいた。『見せたいものがある』と言ったのはとっさの嘘だった。

男とひとくさり語り、個展が不可能であることを告げられた。なんとなく分かつてはいたけれど、男の気の使いようが嬉しかった。

だから絵を見せてみた。男は吸い込まれるように目を見据え「すごい…」と呟いた。真っ直ぐな目で涼子を見て「ほんとにすごいね」と微笑んだ。

同情も軽蔑もなく純粹に涼子の生涯の絵を称えていた。その目は優しく、涼子はそんな目をはじめて見た。

翌日は雨が降っていた。じめじめとした空気は気分が悪く、間接がきしきしと痛んだ。冷え込んだ空気は免疫のない体にこたえた。

(特急列車。分かったかしら)

ふとそんなことを考え、暖房をつけて静かな部屋に横になった。雨音を聞きながら、程なく涼子はそつとまどろんだ。

数日が経った夜、涼子がだるさを感じソファに座ってうつむいていると、部屋にインターホンの音が鳴り響いた。

「はい…?」

そつと窓を開けると男が立っていた。

「香坂さん…」

「いきなりごめんね」

「どうしたんですか」

「前の話なんだけど」

「え？」

「俺、君の個展を見てみたい。館長にも話をしたんだ。少し難しいかもしれないけど、やるだけのことをしてみたい。館長はいい人でね、考えてくれてる。君に会ってみたいと言っているよ。事によつては役員に話してみてるそうだ。実を言うと、俺、今の仕事が好きでない。でも君の絵を見て感動したよ。君の願いをもし自分があるそこにいることで協力できるならやつてみたいんだ」

そう一気に語り終わると香坂は、驚き顔で黙ったままの涼子を前に、決まり悪げに「今日寒いね」とか付け足して言ってみた。

とりあえず涼子は香坂を家の中に招き、落ち着いた香坂がゆっくりと語り始めた。

「俺ほんとはまだあまり信じられてないんだ」

「え？」

「エイズって。一年後にはいませんって。若月さんは信じられるの？」

「死に際を創造できるの？なんてことを言っているんだっただけじゃないわ。でももう体がいろんなことに追いつかないの。あたしが死ぬ、というよりは、いろんなことが終わってしまうんだと思う。あたしから立ち消えてしまふんだと思う」

「もう絶対に治らないの？」

「ずっと自分は長くて二十年で終わることを聞いてきたのよ、もともと体は弱いほうだったし」

黙るしかない香坂に涼子は少しずつ身の上話をしだした。

「確かに最初は訳が分からなかった。お母さんもお父さんもいなくなつてはじめて怖い…って思った。医者は精一杯楽しんで生きなさいって言うの、あたしも少しずつだけれど、限られた時間を大切

に生きようとやっと思えだした。毎日を無駄にしちゃいけないんだって。辛いときとか寂しいときは絵を描いてね。親戚のおじいさんがいつも絵を褒めてくれて、いつもこっそり教えてくれていたから絵を描くのは楽しかったのよ。」

涼子はあくまでも懐かしむように話すが、その手はしっかりと強く握り締められていた。

「でも中学生のときに、以前まで『若月さん』だったあたしが、いきなり『感染者』になってた。『可愛い顔をしてやることやってるんだね』って。田舎だったから広まるのも早かったし、両親が亡くなつて身を寄せていた家の親戚のおばあさんはあたしのせいで周りに白い目で見られるのを嫌がったわ。高校になつても男の子は最初はちやほやするくせにエイズだつてことを知ると、散らすようにいなくなつちやつた。『美人でもやれないなら意味ない』って。友達にはみんな同情してくれたけど、好きな男の子とそれぞれ付き合つていって楽しそうだった。彼とのデートを終えて言うの。涼子が可哀想って。もちろんホントに親身になつてくれる友達もいるけど……」

香坂は眉間に深い皺をつくり息を殺して静かに聞いていた。気持ちとしてはもう聞きたくないほどに張り詰めていたのだけれど。

「でも。あたし……」

言葉がふいに途切れそつと彼女を見ると涼子はぐつと俯いて忙しく息をしていた。リズムが早くなる息の調子を聞いて、香坂は腕を伸ばし涼子の右肩に優しく添えた。

「大丈夫。ずっと聞いてるよ。」

「あたし……」

「うん」

「悔しくて」

そう言った声はか細く上擦っていた。涼子は無理に微笑んでみせたが、歯をどれほどきつく食い縛つても涼子のなかで込み上げてくるものを止められはしなかった。涼子の瞳にはみるみる赤みが挿し、

艶っぽくなつた縁から堰を切つたように大粒の涙がこぼれだした。香坂は泣き崩れ嗚咽を漏らす涼子の背中に手を触れ、そのままぐつと抱き寄せた。

「辛かつたね」

そう一言だけ呟いて涼子の泣き声を止めようといつそう強く抱きしめていた。「泣かないで」そう思うと自然と腕に力が込められ、その一心さのために、誰かを純粋な衝動で抱きしめることなんて随分久しぶりであることに香坂は気づくはずもなかった。

「大丈夫？」

涼子の泣き声がだんだんとおさまってきた。背中をさすっていた手を除々にのけて、そつと顔を覗き込んだ。涼子の目の縁はまだほんのりピンクがかり、濡れていた。

「目腫れてる…」

香坂が心配そうに、でも少しだけおかしそうに言つと涼子はぱつと手のひらで覆い隠しそつぽを向いた。

「なんでよ。見せて？」

涼子はその仕草が嬉しく、香坂がからかつて手首に触れると涼子は必死で体を揺すり香坂の手を必死で払おうとした。

「ぶさいくだもん…」

「うん」

「なっ…」

涼子が不屈きな言葉に驚くと、香坂はすつと涼子の両手首を掴んで目を合わせた。

「うそ。まあまあだよ」

そう言つてにゅと笑つとぱつと両手を離した。

「落ち着いた？」

「…ち」

「ん？なんて？」

「はれんち！」

涼子の顔は真っ赤だった。

その後も涼子は「図書館の客を抱きしめるなんてなってないよね」「男はやだやだ」などぶつぶつ文句を言ったが、顔がほんのり上気していた。

香坂はその様子を見て笑い、「ごめんね」と謝り涼子は「別にいいけど」と呟いた。

「協力するよ。いろんなこと。個展ももちろんそうだけど」

「いろんなこと？」

「買い物とかだつて大変だろう？」

「でも香坂さんは……」

「前から思つてただけど、香坂さんってなんかすごいかゆいよ。なんか読みもかさかさしてるしね。千裕でいいよ。みんなそう呼ぶ。もう図書館の貸し出しのお兄さん、じゃないだろう？」

「もうじゃあなんなの？」

そう言われてみると、なんとなく分からないので、まあ「友達」と言ってみても良かったが少し照れくさいので「抱擁者？」と試してみた。涼子はそれはまったく気に入らなかつたようで「香坂さんは」と続けてみせる。何度かそういつたやりとりを続けて千裕は「サポーターだよ。協力者」と言った。

「千裕：はいいのそんなことして？嫌がる人がいるんじゃないの？」

千裕はぶつと吹きだした。

「中学生じゃないんだから。そんなこと気にしなくていいよ。それとこれは別。感動したから個展を開きたいと思った。俺はまだ、配架作業とちよつとしたレファレンスに答えるくらいしかしたことがないんだ。まだまだ半人前だから大事な仕事なのは分かつてるんだけどね。選書にはまだまだ経験がいるし。でも、本音としてはもつと人とつながっていたいんだ。だから依頼主の協力をする。涼子にとつても俺にとつてもいいことじゃん。気持ちが悪いたら熱心で

良いファンくらいに思っ

「うん…」

「ねっ」

「…さりげなく涼子って呼んだ」

「いやな奴め」

こうして二人は近づいていった。涼子は男に親切にされることに慣れないながらも千裕の頼もしさに喜びを感じたし、千裕はようやく図書館での勤務にやりがいを見出し始め、涼子の純粋な不器用さにいつそう親しんだ。

涼子が図書館を訪れた日はよく一緒に帰ったし、病院帰りの日は必ず遅くなくても立ち寄った。以前より涼子は笑うようになったし千裕は日々をしつかりと生きるようになった。

「涼子、俺の前では絵描かないんだね」

図書館での二人の帰り道、千裕は気になっていたことをふと口にした。

「恥ずかしいもん」

「描いてよ。俺描いて。男前に」

「難しいからやだ」

そういつてふいとそっぽを向くやいなや涼子はくすくすと笑った。千裕もつられて笑う。ひとしきり笑うと一息ついた涼子は「明日晴れるね」と言った。

確かに今夜の空に浮かぶ曇りない満月は美しい。夜空を見上げる涼子のガラス細工のような瞳にもはつきりとそれが映し出されていた。二人月夜に照らされて、千裕は涼子の耳や鼻や瞳、それらをかたどる柔らかな輪郭はこんなにも繊細に美しく描かれていただろうか、と思った。

佳奈との約束の日になった。七時になって『千裕いる？』のメールを見て思い出し慌てて家を出た。佳奈は少し怒った様子で立っていた。平謝りを繰り返して奢ることを約束した。駅から少し歩いた小綺麗な雰囲気のある居酒屋に入ると、注文やらを経て、いつの間にか機嫌を直した佳奈が訪ねた。

「バイトはどう？」

「まあ、バイトじゃなくて研修みたいなものなんだけど」

「そうなの。千裕はじゃあそのまま図書館に？」

「うん。今のところにはずっといるかは分からないけど、図書館には、いることになると思う」

「安定しても結婚はしないの？」

「結婚？」

「知ってる？絵里も暁子も結婚したんだよ。部活の先輩も」

「へえ。そういえば原田も結婚するとか言ってたな。」

「原田くん？美里ちゃんと付き合ってたよね。美里ちゃん？」

「いや。もうだいぶ前に別れたな。年上って聞いた」

「へえ。原田くんどうしてるの？」

「原田は今運送系だよ。収入もいい方なんじゃないか。だから結婚するんだろ。」

「そうなんだ。で、千裕は結婚しないの？」

「しないよ。第一相手がいない」

「…千裕は本当に彼女いないの？」

涼子にも同じようなこと聞かれたな、と思っておかしくなった。

「いないよ」

「どうして？」

「どうしてって言われても。できないんだよ」

「謙遜だね！何人が彼女いたって言ってたじゃん」

「そりゃ遊んでたときがないとは言わないけど。相手も本気じゃなかったし、相当遊んでたからな。でももうそういうの面倒になった。バカバカしくなってる今や他人」

「千裕、根はまじめだもんね」

千裕は苦笑いして「そゆこと」と呟いた。

「じゃあ好きな人もいないんだ？」

「うん…まあ」

「何いるんじゃない？」

「いないよ」

思いのほかきつぱりとした口ぶりになった。嘘では、ない。俺はサポーターなのだ。

そう思い、千裕はぐつと酒と一緒にさつきから感じてならない決定的な違和感と矛盾を飲み込んだ。

佳奈はその様子をじつと見つめ話し出した。

「でもあだし、この前千裕が綺麗な人と歩いてるの見ちゃったよ。幹線沿いだった」

「あ…そう」

「彼女かと思っちゃった」

佳奈はにっといたずらっぽく笑ったが千裕はなんだか無性に腹が立った。見ちゃった、思っちゃった。やたらに粘っこい表現が千裕の敏感になった神経を刺激する。

「じゃーあ、あたしも千裕もひとりぼっちになっちゃったんだね。ひとりは辛いよね。行きずりの相手はもういいね。もう周りも結婚しだしてさ。ずっと一緒にいられる人じゃないとダメだね」

翌日はまた図書館勤務の再開だった。昨日のイライラで少し憂鬱

だったが館長の呼び出しを聞いて、憂鬱は緊張と期待に変わった。あれ以来、館長に呼び出されるのははじめてだ。

「館長。香坂です」

そう言っつて部屋へ入ると館長はいつもの穏やか顔で、少しばかり早めに来た千裕を迎え入れた。

「香坂くん。始めに言っつておくよ。いい話と悪い話がある」

「何ですか」

「まずはいい話をしよう。涼子さんの個展はおおむね賛成だ。余命一年のエイズ患者が最期に個展を開く。そのメッセージ性に期待ができるんだ」

館長はゆっくりと頷いた。

「次は悪い話だ。図書館で開くことにこだわらなければならない理由が分からないという意見もないことはない」

「バックアップはするが他でやれということですか？」

「そういうことになる。図書館の展示室は基本的に、地方の重要な資料や出土品なんかを管理する場所だ。簡単に貸すわけにはいかないんだよ。でも幸いここは有名な画家の何人かの出生地でもある。この図書館も一応文芸に傾倒していることだし。そこにこじつけて開催するのも無理な話ではないかもしれないな。そこでなんだが」

「はい」

「彼女に明日来るように伝えてくれんか。話がしたい」

「あ。はい。それはもう」

千裕が頷くのを見つめ男は口を開いた。

「涼子さんは君の恋人かい？」

千裕はいきなりの言葉に呆気にとられ「違いますよ」というまでに少しだけ時間がかった。

「それにしてはえらくその彼女のことに執着するんだね」

「それは…彼女の絵がすごいからです」

「ゴッホもまともにしらない男の言葉とは思えんな」

「それはそうすけど。ほんとにすごいんですよ。それは間違いな

いです。それに病気。一年の命しかないといわれたら俺も協力したくなります」

言った途端に喉がつまるような感覚を覚えた。決して自分の気持ちにぴったりと当てはまるような言葉を口にしていないのが分かった。裏表のような嘘ではないけれど、そのまま気持ちを言い表しているような本当ではない。

「同情してやっているということかい？」

「それは違う」

思うよりも先に強い言葉が出た。軽くすみませんと謝り、男は頷いた。

「どうしてだい。同情だろう？決して悪い言葉ではないんだよ。

同情するというのは心の清い人間だからだ。君にはその素質があるよ。君がそうして懸命になる理由は、絵がすごいから、命が短いから、なんだね？」

「違います。図書館で開きたいっていうなら俺も司書を目指した身です。協力してみたい。やれることをしたい」

「なるほど。絵がすごいから、命が短いから、だけではなく、今の勤務がつまらないから、ってことだね？」

どうしてだかまた否定したくなった。館長は確かに千裕の言葉をそのまま簡潔に言い表しているはずなのに。館長の言葉を聞いていると自分がとてもない偽善的な人間に感じてしまう。だから否定しなくなるんだろうか。自分を正当化しなくなるだけなんだろうか。自分が分かっているだけで、本当のところはそういうことなのだろうか。でも違うとしか思えないのだ。何かが違うのだ。もっと、こう、大きくて、深くて、少しだけ優しいものであるはずなのだ。もっとも優しいという概念はまだ会得してはいないはずなのだけど。にわかになんか静かになった青年を認め、男は話し出した。

「同情という言葉はある人間にとっては一歩の脅威になりうるよ。それはその人間が持っている感情とは似ていて、それでいて全く異なるものだからね」

なんとなく続きが知れて千裕は俯いた。

「愛情だよ。誰かを愛している人間にとって同情と言われるのは屈辱でしかない。愛情はもつと、主体的なものなんだ。相手から刺激を受けるのは同情と同じだけれど、行く先が違うんだ。同情は憐憫へ行き着くもの。愛は、体の芯を走り抜けるように熱く、強く、欲望に行き着くものなんだよ。僕はそう思う。だから何よりも強くて、どんな形にもなるし、我がままにもなるんだね。君は今、欲望を持ったね。協力したい、やれることをしたい、と。君が懸命になつたのは、絵がすごいから、命が短いから、そんな受身的なものでもなければ、勤務がつまらないから、そんな後ろ向きな欲望でもないはずだ。きつと立派な愛だよ」

「…でも彼女は…」

「エイズなんだってね。哀れだよ」

「それに…一年後にはいません」

「そうだね。悲しいことだ。でもちつとも彼女を好きでない理由なんかになつてないよ」

まったくその通りだ。ただ、俺は。

「本当は分かっているんだね。」

こんな時でも穏やか顔の男はやっぱり穏やかだった。いつもより穏やかであるかもしれないくらいだった。だから千裕は、

「怖いんです…。彼女を好きだと認めてしまうのが怖いんです」と呟くしかなかった。

「死んでゆくことを分かった上で共にいることはとても辛いだろうね。必ず君は置いてゆかれるよ。彼女の弱りゆく姿に役立たずな自分。何もしてやれない自分が歯がゆく、呆気なく彼女は逝き、やり残したことや思い出だけが君に残るよ。」

うなだれる千裕に男はなおも続ける。

「恐れることは間違いでないよ。私欲なくして動く人間などないんだから。そんなものは尊い坊さんだけだ。愛なんて欲望なんだから。彼女に素晴らしい後世を送ってもらうために、君が何十年の

苦しみを背負うことを喜んで受け入れられるかい？にわかには返答しづらいだろう？」

彼女と一緒にいたい。でも傷つきたくない。所詮、本音はこんなところだった。ただ、彼女のためにストイックな人間になりきれない自分が不純なように思った。

「でもね、出来ないと思うなら、彼女に関わるのをやめなさい」
はつきりとした口調に思わず顔を上げた。

「今ここに、君の弱さなんていらなんだ。彼女といることは彼女の死を見つめることなんだから。今求められるのはそういうことだよ。半端な気持ちではいけない。それに君にも人生があるんだ。君は傷つかず、いつかエイズの哀れな女がいたな、と思うことができるかもしれない。そこには温かい家庭があつて君は幸せに生きられるかもしれないよ。それはそれで素敵だよ」

言葉を失う千裕に追い討ちを掛けるように男は続ける。男は、鷹揚だ。

「そこでだね、ここから離れたここよりも大きな図書館が人手不足なんだ。その館長に君の紹介を書いてやってもいい。君はよくやっているよ。レファレンスも立派だったそうだね。涼子さんのことも任せなさい。どうなるかは会ってみなくては分らんが、できるだけ良いことをするよ」

「涼子を置いて逃げろというんですか」

「そうだね。逃げて良いことがあるならぜひそうしなさい。僕は苦難に敢然と立ち向かうようなストイックさは好きでないんだ」

男はぐっとテーブルに身を乗り出して千裕を見据える。あくまでも穏やかな様子だが、にこやかな顔に、感情は読み取れなかった。そして言い放った。

「君は今ならまだ戻れるよ。よく考えなさい」

(二後半)

その晩、帰宅した千裕の頭のなかに、館長の言葉はこだまし続けた。

(館長の言うことは正しい…)

自分はどうしようもない破滅の道に進んでいるとしか思えなかった。少し前の自分なら諦めることが得意だった。無駄だと思えるようなことを馬鹿みたいにこだわらず、切り捨てる潔さがあった。なのに、今はちつともあの時の自分を思い出せやしない。ソファにもたれテレビに出ている芸人たちが騒ぐのをぼんやりと見ていた。網膜上にはその様子がしっかりと映し出されているはずなのに、彼らが何を喋り、何をしているのかはいまいち分からなかった。

涼子と少ない時間を過ごしていくか。でも、それに対する孤独の時間はきつと割に合わないほど随分長いだろう。

保身のために涼子から離れるか。館長は保身は恥ずべきことでない、と言ったのだ。俺も、残念ながらそう思える人間だ。館長の言葉は自分の言葉のように理解できた。以前の自分なら、迷わず後者を選んだろう。

どちらにしても正解なんてない、とは思うが、二つ目の選択は間違いないだろうと思えたし、きつと今までの自分もそう思っ生きてきたのだ。だから、迷うはずなんてないのに。

翌日、千裕は勤務を終えた後、館長に会いにいった。

「考えたかい？」

「はい…」

「急がなくても構わないんだよ。昨日言っただけだから」

「…館長の言うことは分かりました」

「うん」

「紹介状、お願いします」

「…いいのかい？」

「涼子は館長が後押ししてくれる。俺は司書として出世する。いいことだらけです」

「涼子さんには話したのかい？」

「いいえ。」

「そうだね。それがいいだろう。今日涼子さんと話したよ。たくさん話をさせてもらったが、僕は、彼女を応援するよ。なに、役員くらいなんとかなる。なんとかさせてみるよ」

館長の頼もしい言葉に、千裕は複雑な気持ちになり、そんな気持ちの自分に驚いた。

「涼子、なんて言ってましたか？」

おずおずと千裕が尋ねると男は千裕を一瞥して、言いはなった。

「もう君には関係ないことだろうね」

そういえば、あれは、いつだったんだらうか。確か高校三年にも満たない時期だったか。

仲の良かった友人が熱烈に恋に落ちた。

毎日毎日悩み、何度も何度も彼女に近づき、その度にフラれていた。それでも、苦労の末熱意が届いたのかやっと付き合えたようだった。が、結局は彼女の「重い」というたった一言で二人は終わった。たったの半年だった。友人は泣き崩れ死んでしまうのかと思うくらい痩せ細った。心配になって家から二駅ほど離れた友人宅へ向かった。自室でぼんやりと外を眺める友人の横顔が、部屋は真っ暗だったのに、今でも鮮やかに目に浮かぶ。うなだれた友人の聲が、搾り出すような小さな声だったのに、今でもはつきり耳に残っている。

『悪い。もう、誰とも関わりたくない…』

あれ以来、恋で身を滅ぼすなんて、馬鹿げていると思ったのだった。溺れてしまっただめなのだ。理性的な判断をし、諦めていれば友人は楽しい生活を送れたかもしれないのに。友人が哀れだ。割に合わないじゃないか。こんなに傷つかなければいけないなんて。

そんな昔話を思い浮かべながら、どうにもやりきれない気持ちを抱いて図書館を後にした。自分の選択は、館長の言い放った一言に集約されているようだ。ここで諦めなければ俺はただの馬鹿なのだ。あの時、あの友人の横顔と声に学んだのだ。なのに、なんだか煮え切らない。そんな想いばかりを巡らし、なんとか自分を抑えた。駅周辺の街灯やネオンの光が遠めに認められたところで、ポケットの中が振動していることに気づいた。

(メール…涼子?)

今日図書館行きました。今日は遅いんだってね。お疲れ様でね、お疲れ様ななか申し訳ないんだけど電光灯買ってきてくれなかな。で、付けてほしいの。ごめんね…

(涼子…)

千裕はいつもの癖のようにはしないで、そのままぎゅうっと強く手の中の彼女を握り締めた。

「涼子？」

千裕が電光灯を持って涼子の家を訪ねたが、その日いつものように涼子は玄関まで迎えにこなかった。

「頼まれた物買ってきたんだけど…遅くなってごめんねーなかなかなくてさ…?」

独り言のように呟くが涼子の返事はない。扉に鍵がかかっていなかったことを確認し、おそろおそろ玄関の床を踏んだ。真っ直ぐに伸びた廊下の先にあるリビングの横、涼子がアトリ工部屋として使っ

ている部屋からは明かりがこうこうと灯っていた。明かりに誘われるように部屋へそつと入ると、大きな絵を前に手足が少し伸びてだらんと小さく横たわっている人を見た。

「…涼子…？」

内臓が千裕の中を落ちていった。

「涼子！」

しかし、駆け寄り抱き起こすやいなや、涼子はすつと顔を上げ眠そうな目をして千裕を見た。

「ん…千裕…？」

「あ…な…」

「寝てた…」

そう言つて涼子は少しだけ伸びをして目をくしゅくしゅと擦った。

「…ちゃんとしろよ！心配させんなよ！」

「ごめん…」

いきなりの怒声に涼子は驚いた。

「…もう…死んだかと思った…」

ざつと千裕は座り込み両手で髪を鷲掴んだ。涼子の横たわった姿に体中の細胞が震えだし、胃の中で硬い不穏な物体が荒々しく落ち込み、その反動で吐き気がした。はじめて感じた涼子がいなくなるということ。

しかし、少しだけ落ち着くと、申し訳なさそうに伺う涼子を見て、安心とも心配とも怒りとも違う感情が沸き起こった。

もつと突き抜けていて結局は怒りも悲しみもそこへ行き着いてしまふようなそんな深くて大きいもの。それでいて本当はずつと以前から感じていたもの。

焦った、良かった、涼子、涼子。

ああ、そうだ。分かった。これだ。これが今すぐく俺の気持ちにぴたりしてる。

大丈夫。だつて涼子は今生きて、俺にこんなにも謝っている。少しも時間を無駄にしたくない。涼子と離れることは保身じゃない。千

裕はそのことにやっと気づいた。
涼子、これは、どうやら愛だよ。

「俺を馬鹿だと思えますか」

図書館の静かな一室。金木犀の植えられた庭を見渡せる窓の前に立つひとりの男の背中に投げかけた。

「思わないよ」

感情の見せない返事に「そうですか」とだけ呟いた。

「だが賢明だとも思わないよ」

怒っている、のだろうか。

「僕には難しすぎる問題だ」

呆れている、のだろうか。

だが振り向いた男はいつものように穏やかな笑顔だった。

「僕が間違っている、と言ったところで君は聞かないだろうか？」

挑戦するかのような言葉に怯んだが、昨夜の涼子に感じたあの一瞬に叶いやしなかった。千裕が「はい」と頷くと男は鷹揚に笑った。

「いいんだよ。何かが間違っていることなんてありえないんだから男は窓辺から離れ簡素な椅子に落ち着いた。

「君は変わったよ。最初はどうしてこんなに冷め切ってしまったのか分からなかった。色んなことに賢すぎてつまらない男だと思っただよ。体が若いくせに頭が老人のようで君の体の中で悲鳴を上げているのが伝わった。なのに、臆病だから頭の中で作った理屈で自分を押さえ守ろうとする」

ふっと笑った不敵とも言える笑みになんと返せばよいのかは分からなかった。その様子を見て取った男はひとつため息をついて、やはりにっこりと笑った。

「今は正直驚いている。こんなに無謀な男だったとはね。他人の恋愛ほど難解なものはないよ。常識や理性から驚くほど簡単に逸脱する。でも、分かったらどう？」

少しだけ調子が変わった口調に千裕はただこくと頷いた。

「賢明さがすべてじゃないんだ。僕にとっては狂っているとしたか思えないようなことでも君の中ではそれがないとダメなんだろう。君は変わったけれど、悪くはなっていないよ」

思わぬ言葉に千裕は驚いた。男は千裕の言葉を待たずになおも続ける。

「人間は困ったものだね。触ると痛いだろうって予測はつけられるのに絶対に感じられないんだから。でも、It is impossible to love and to be wise. ってね。フランシス・ベーコンだ。大丈夫。本当の愛なら愛したことを後悔なんてしないよ。本当の愛でないなら尚更後悔なんてしないさ。恐れないで、頑張ってごらん。たくさん喜びもあるはずだから」

個展の話はスムーズに進んでいった。館長はさすがに顔が広く、役員経験もあつたからあの穏やかに不敵な顔を持って話を推し進めることはたやすかつた。喜ばしい想いはさながら、すごいじじいだとも思い、何より今まで話を平然と交わしていた自分が空恐ろしくなつた。呆氣にとられた千裕の横で涼子は純粹に喜んだ。今回の一件で、図書館館長の地位というのは彼女の中で政治家よりも、学者よりも、絶大なものとなつたかもしれない。涼子は「館長つていうのはさすがだね」と無邪気に言う。その様子はとても可愛い。

涼子に今の想いを打ち明けることは出来なかつた。涼子はきつと戸惑い、千裕に対して距離を置きだすかもしれない。涼子はもう自分の終りを受け止めている。誰かと共にいることを決意するというのは、もう一度生きだすことを意味するなら、涼子の答え派自然と知れる。千裕が想いをぶつけて涼子の平安を乱すことは殺人並みの行為にも感じた。

(でも、もう時間が…)

一度、告白は諦める決意をしたものの、涼子の余生の六分の一の時間が過ぎてしまったことに気づいては気持ちばかりが焦つた。

買い物に付き合つてほしい、ということまで千裕は休日を利用し涼子

に会った。涼子がよく行くという画材屋に寄り、商店街のように隙間なく店が立ち並ぶ路地へ入った。どうやって営業しているのかわからないような寂れた本屋や美容院もあった。涼子は「自分のお店が持てるなんて素敵ね」なんて少し見当違いなことを言ったりしたが、体調も良さ気で鼻歌交じりに歩いていった。

「千裕見て」

風変わりな煉瓦造りの化粧品屋に気をとられていた千裕が涼子の示した方を見ると、そこには一見何屋かわからないような古びた店があった。せり出したショーウィンドウには西洋風のアンティークものが並んでいた。

「なんだろう？アンティークかな？」

「入ってみよっか？」

そう言つてにっつと笑うと涼子は千裕の返事も聞かずさっさと入っていった。

「ちょ…涼子」

追いかけるように店内に入ると店員は不在で、棚に壁や天井、至る所に所狭しと色んなものが飾られていた。

「すごいなこりゃ…」

星が散りばめられた照明具やレトロな小さな机、虹色の箱、何のために使われるのかわからないようなものばかり。その中の一番大きなボードの上、大小様々色も様々な地球儀があった。

「千裕、地球儀だよ」

「うん。色んなのがあるな」

端から順に見ているとちょうど真ん中にあつた薄い黄色をした地球儀にふと気づいた。

「涼子、これ地球じゃない」

「わ…ほんとだ」

「月だね。この場合、月球儀っていうのかな。クレーターがいっぱいある」

二人並んでくると回しながら見ていた。不思議な地名がそこに

はあった。

「見て。『嵐の大洋』だつて」

涼子は月の表面に描かれた水色の歪な円形を指差しながら言った。反対側に足を三角に折った千裕が人差し指で器用に回して言う。

「ほら。『危難の海』」

涼子も負けじと指を月の上に滑らした、

「『虹の入り江』良くない？」

「いいね」

にっと笑う涼子。

「これもいいよ『夢の湖』」

涼子のわあっという声に千裕はふっと微笑んだ。

「ねえ。普通の日本人の苗字もあるよ……」

一本の経線の真横、小さな文字で日本語がそこにはあった。

「この人の土地かな。月の土地を売買する時代だからね」

「そうなの？」

「そうだよ。確か二百エーカーを小額で簡単に買える」

そういうと千裕ははっとしたように話を続けた。

「生きていてもこうやって星に自分の場所を作られるんだよ。自分だけの宇宙上の点。特急列車なんかなくなつて」

そう嬉しそうにはしゃぐ千裕を涼子は見つめた。「ねっ」と後押しする声に涼子は「そうだね」と呟いた。

「千裕、もう出よう？」

「もういいの？」

「うん。なんか疲れちゃった」

そう言うとき涼子は早々と店を出た。辺りは少しだけ暗く遠くに見える空には入道雲が浮かんでいた。その雲に乗っかって、おぼろげな欠けた月がいつまでも二人を追いかけたが、涼子は二度と黄色い不思議な土地の球について話をする事はなかった。

(四前半)

四

まとまった答えが出るわけでもなく、何が良いのかも分からない日が続いた。千裕の想いは募るばかりで、なのに涼子はよそよそしさを見せるようになった。

そんな中、図書館では「キッズマンスリー」なんていう企画が始まっていた。図書館の利用者に子供が少ないのだ。週一だった紙芝居は、水曜日と土曜日の午前中に開かれることになり、移動図書館も今までより二、三ほど多くの公園に回るようになった。千裕も紙芝居や移動図書館のバスの添乗員に借り出された。ピンクや白色を基調とした子供の絵本広場で、「そこでうさぎさんは…さあ〜どうしたのかなあ？」なんて言いながら紙芝居を捲るスピードに工夫をこらす藤原先輩を横目に、司書はいつから保母さんになったのだろうかとお兄かとひっそり考えたりもした。移動図書館では子供たちに「お兄ちゃん、幼虫がいつぱい載ってる図鑑でどれ？一緒に探してよ」と言われ苦笑いもした。虫は、あまり好きでないのだ。

今日も千裕はひとり、図書館の裏手で移動図書館のバス内に残り、本棚の整理をしていた。何冊かをごそつと取り、積み上げていく。

「千裕っ」

ふと呼ばれて積み上げた本から声のする方へ目をやった。図書館をぐるりと囲む柵の向こう側にこちらに向かって手を振っている人がいた。

「佳奈…」

佳奈は少しだけ微笑んだが、表情は固かった。

「頑張ってるんだね」

佳奈は千裕を取り囲むように群がる本や、清潔そうなバスをぐるりと見やっつてからエプロンをつけ、片手には怪傑ゾロリの本を持った千裕をもう一度見た。

「ぼいじゃん」

「何か用？今、仕事中だから」

「今日時間ある？」

佳奈の表情は固い。いやな予感がした。

「…何？」

「ごめん後で。仕事終わったら教えてね」

そう言つて佳奈は千裕に不穏な空気だけを残し去っていった。

佳奈は、昔から俗に言う女の子らしい性格の持ち主だった。ピンク色と、可愛い小物が好きで、感情表現も豊かだった。小学生のときはピアノを習い、中学生ではちよつとしたメイクに興味を持ち、高校ではカッコイイ彼氏との生活に憧れた。高校は普通科と看護科と商業科に分かれていた。普通科では、千裕が在籍した良い大学へ進むための特進クラスもあつたし、佳奈が在籍した短大や専門なんかも目標にする普通クラスもあつた。学校には学生社会ならではの派閥意識のようなものもなくはなかつたが、それでも科やクラスを越えて学年全体の仲は良い方であつた。とりわけ少数の特進クラスには尊敬や嫉妬に近い憧れを持ったものだ。千裕は佳奈と付き合っていたときから志望していた、地元から遠く離れた教育や文学が優れた大学へ進んで一人暮らしをはじめ、佳奈は地元の服飾の専門学校に進んだから、二人が街で出会うようなことはなかつた。

専門を卒業し、佳奈は実家のすぐ近くにあるシヨップの店員をしていたが、品行も良く、よく働き、可愛らしい彼女はもう少し大きなシヨップの方へ回されたのだ。それが千裕の勤める図書館の地域にあつた。千裕は図書館ならどこでも、と配属先にこだわらなかつた

結果、結局は地元から少し離れたただけのこの土地へやってきたのだ。千裕と偶然会った日はまさしく、佳奈が赴任先としてはじめて店を訪れた日であった。

「それに以前の職場では悲しいことがあったから周りのスタッフが気を使って新しい職場を提供してくれたのかな」

千裕は黙って聞いているが、仕事を終えて程なく佳奈と落ち合ってからずいぶん時間が経つ。佳奈はいつになったら本題に入るのだろうか。いざ話すとなって避けている様子すら伺える。

「あたしね、以前働いていたところに憧れていた先輩がいたの。話の先はまだ見えない。千裕は自然とイラつく。

「先輩には長い間付き合ってたやつと婚約した人がいるの。康介さんっていうの。二人とも幸せそうだった」

「で？」心ならずも冷たい口調になったかもしれない。佳奈は千裕のそんな様子に気づかないのか、気づかないふりなのか構わず言った。

「康介さん死んじゃった」一瞬の冷たい沈黙。

「病気だったの」佳奈の表情は良くない。「え…」と呟く千裕をなおも構わない。

「病名とか詳しくは知らないんだけど。先輩悲しそうだった…。日が経つにつれ忘れるどころか疲れきった様子で目も虚ろになってゆくばかり。仕事もやめて、あたしが心配で先輩の家を訪ねたときにはもう笑わなくなってた。人形みたいだった。ぼんやりとしていて声もかすれていて」

以前、そうゆうものを確か俺も見た、と千裕は思った。暗い部屋にぼんやりと、搾り出すような声。佳奈が見たものはそれよりももっと悲痛を帯びたものだろう。「そうか…」とだけ呟くと佳奈は「でね…」と続けた。いつの間にか瞳はうつすらと湿っているようだった。

「先輩、自殺した」

言った途端にじんわりと瞳は潤う。じっと見る千裕の視線を逸らす。

「先輩、遺書に『康介がいないと生きていけません』って……」
衝撃的な話で千裕が言葉を接げないと、佳奈は「もう大分昔の話なんだけどね」といって微笑んでみせた。千裕にそんな悲しいことがあったのか、と驚く一方で、胸が裂かれるようだった。佳奈が涙と一緒にこの話を持ち出した理由を考えると恐ろしかった。だが千裕の想いとは裏腹に、佳奈は少しだけ泣き止んで落ち着きを取り戻すと容赦なく話した。

「千裕：好きな人いるんでしょ？」

胸がざわつく。息が荒くなる。佳奈は千裕を見ない。

「……その人、エイズなんでしょう？」

千裕はかっと目を見開き心臓がドクドクと早鐘するのを聞いた。吐き気がする。

「……やめなよ」

(四後半)

千裕はぎつと立ち上がり、佳奈を残して店の出口へと向かった。それ以上は聞きたくなかった。ただでさえ挫けてしまいそうな時が最近多いのだ。時間ばかりが過ぎていて、涼子はどこか最近よそよそしい。正しい意見など、諫めの言葉など今はいらなかった。八つ当たりなんて空しいこともしたくなかった。

「千裕：！待って千裕！」

声が追いかけてくる。

「ねえ千裕！話終わってない！」

佳奈は千裕の背中に精一杯手を伸ばし、そして、しがみついた。千裕は足を止めたが何も言わなかった。

「千裕やめなよ。千裕が傷つくだけじゃない」

佳奈の必死の言葉にも千裕は何も答えない。佳奈の方へ振り向きもしなかった。

「未来のない人を好きになってどうするの。千裕。それは妄執だよ」
佳奈は必死になって千裕の表情を伺おうとするが、千裕の整った顔に表情はなかった。

「お願い…千裕。見たくないよ千裕がダメになってゆく」
千裕の胸に回した腕にいつそう強く力を込め、額を背中に押し付ける。

「千裕だつて知つてるでしょ…残酷なくらいに私たちは忘れていくじゃない。今なら千裕が…、千裕が私を忘れたようにいつかその人を忘れる日がくる。今は信じられないかもしれないけど、必ずそうなのよ。じゃなきゃ後戻りできなくなっちゃうかもしれないよ…千裕」

更にぎゅつと力を込めて抱きついた。千裕の荒々しい懐かしい匂いがした。

「…こ」

「え…なんて？千裕。もう一回」

押し黙っていた千裕の呟きを聞き逃すわけにはいかなかった。

「…涼子…」

それは小さな声であつたが、痛々しいものであつた。千裕の表情はいつの間にか目に見えてわかるような悲しさであふれていた。千裕の瞳の縁が煌いていた。佳奈は心臓がズキンと痛むのを感じた。それは千裕の苦しさが憐憫へ行き着いたゆえのものであつたのか、発せられた言葉が佳奈へ向けられたものではないことへの寂しさによるものであつたのかは、佳奈には知る由もなかった。佳奈には悲しげな男の背中からゆっくり離れ、呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

男の背中にどうしようもない群青色のような暗さが押し掛かっているようで、あんなに大きく愛しかつた後姿が小さく、弱弱しく感じた。そんな千裕を、見たことなど一度もなかった。佳奈が見た千裕はいつだつて涼しく賢くあつさりすぎる姿だつた。余裕のある態度は頼もしくもあつたが、とても寂しかった。

途端に胸の中がかあつと熱くなった。どうして？なんで？悔しい。悔しい。どうして分からないの？何がいいのよ。ああ。嫌だ。千裕がどんどん知らない人になっていく。

「別れよ」

その日は五月晴れだった。見上げれば空には雲ひとつなく、電線が空をいくつかに区切っていることだけが残念といえれば残念だった。だが、佳奈にはそんなことなど関係なかった。大好きな人から呼び出され浮き足立って向かうとそう言われた。

「なんで…」

「ごめん」

嫌。嫌。訳が分からないよ。つい何週か前好きだと言ってくれたじゃない。

「あたしのこと嫌いに…」

「なつてないよ」

きつぱりと、でも有無を言わさない雰囲気寒気がしたのを覚えている。

「好きな人できたの？」

男は軽く首を振る。鋭い深い目に薄茶色の前髪が触れていた。佳奈はきゆうつとなる。その目がまだ好きなのに。

「じゃあなんで…」

「ごめんね」

悲しそうに首を傾げる千裕を見ると佳奈の心臓はうるさく痛みを伴ってざわつく。

そんな顔、卑怯よ。佳奈は思う。我がままを言って嫌われたくないもの。だから私、ぶりっこをして、「…分かった」って物分りの良い女にならなきゃいけないじゃない。千裕は少しだけほつとしたような顔をして、もう一度ごめんねと呟いて去っていった。

こんな、あつとゆう間の恋だった。

自分の気持ちの大きさに比べて、こんなに呆気ない終わり方が信じられなかった。千裕に出会って優しくなった。物を歪んだ目でみなくなった。すべてが温かく、いろんな人の気持ちに共感できるようになった。なのにこんな結末。何度も何度も、やり直したいと思っただ。実際にそんなメールを送ったりもした。でも、千裕は何も言わ

なかった。優しい言葉も冷たい言葉もくれなかった。それが当時は余計に堪えた。千裕の毅然とした態度に胸が張り裂けそうだった。千裕にしてみれば佳奈に何を言っても無駄であることを理解していたから沈黙を貫いた。佳奈の悲痛に罪悪感があふれたときには「ごめん」と謝りたかった。だがそれでは彼女のためにならないと思い我慢したのだ。彼女が自然と忘れてくれることを望んだ。

だが、千裕の想いのようにはならなかった。ひとり寂しく泣く佳奈に慰めなどあるわけがなく、佳奈は閉鎖的になり、そこから抜け出せないまま臆病な大人になった。

月日が過ぎて、三年ほど経つとさすがに千裕を思い出しても胸が痛むようなことはなかった。千裕と再会し動揺したけれど、愛想にかける新しい職場に落ち込んでいた折であったので、単純に嬉しかった。以前の縋り付くような熱い気持ちは込み上げず、代わりに安堵と一緒に少しだけ寂しい気持ちにもなった。千裕が近くで頑張っているなら、あたしも頑張ろうと自然に勇気をもらったりもした。

なのに、仕事を終えた帰り道、綺麗な女の人と千裕がいるのを見かけどうしようもない焦燥感に駆られた。実際に見ると、想像するのでは大きな隔たりがある。それから幾度となく二人の姿を見かけては、千裕の言った「相手がいない」を思い起こし平然を装うぎりぎりの自分がいた。

「あれって…若月さんじゃないかな…」

同じ高校の看護科を卒業した奈津子が言った。

「知ってるの？」

「うん…。うちの病院によく来る…」

奈津子もまたこの地域の病院に勤めている。佳奈はそれを最近知って、こうしてたまに仕事終わりに会っているのだ。

「どんな人？」

「いや…そんな、友達じゃないから知らないけど…」

佳奈は必死そうだ。奈津子はこの昔からの親友が千裕と別れ毎日のように苦しんでいたことを知っている。気丈な様子であるが、今に

も本当は泣きそうなことくらい顔を見れば分かる。看護師としては決して言うべきでないと思う。だが、奈津子は今、勤務を終え、佳奈の親友なのだ。佳奈の形相に気圧された奈津子は徐々に口を開いた。

「あの子エイズだよ…」

気づくと千裕は佳奈の前に立ち冷たい表情をして立っていった。

「おまえに関係ない」

「分かってるよ…でも」

「大丈夫。俺がどうなるうと俺の望んだことだから。佐倉に迷惑かけやしないし、かけるとも思わない」

「千裕…」

涙ぐむ佳奈に千裕はふうつとため息をついた。

「こんなことになるならもう連絡を絶つよ。その方がお互いのためだ」

千裕は佳奈から遠のいていく。その後ろ姿は五月晴れの下にあったあの時と同じ。

「千裕。待って」

「何」

「涼子さんは千裕のこと好きなの？」

佳奈は冷たく言う。冷たくて投げやりな言葉はその人自身が傷ついているサインだと千裕は知っている。いちいち言われたことに感情的にならず余裕をもってそのことに気づけば丸く収まることもよく知っている。だが、今は、千裕にもそんな余裕はなかった。

「死んじゃうのに？」

その瞬間、千裕は路地に置かれていた小さな鉢植えを蹴り倒した。

「黙れ」と深く唸り佳奈を睨む。佳奈は殴られるかと身を竦めた。

が、千裕は何をするでもなく、しばらく佳奈を見据えると「帰って」とだけ呟き、路地裏を歩き出した。

千裕はひとり路地裏を突き抜け、大通りを足早に歩いていった。夜気は肌刺さるように冷たい。周囲の店やネオンの光がちかちかとうるさい。

千裕は、どうしてあれほど感情的になったのか分からなかった。泣いて分かることは、弱さと気まずさと、泣いても仕方がないことだけだ。ただ、佳奈の一言一言が異様に堪えた。

「死んじゃうのに、ね。」

聞こえるか聞こえないかの声で呟いたが、千裕の声は夜の街の喧騒にかき消され、誰の耳にも届きはしなかった。

涼子が体調を崩し、寝付いてしまった。千裕が病院へ見舞いに行くと、「大丈夫。いつものことだから」なんて悲しいことを言う。そもそもそんな体で一人暮らなんて無理なのだ。千裕は何度もそう言ったが涼子は黙り込んだ。千裕は自分が涼子の家の近くに住もうかと提案してみたが「そこまでしてもらうことはないから」とそっぽを向いた。

涼子が熱を出しても、涼子が苦しそうに咳き込んでも、毎日当たり前のようすぎた。たった一人の女が脚に大地の健やかさを、頬に風の流れを、瞳に空の広さを、そんな世界の当たり前を感じなくなっても世界は気づきもしないだろう。ただ千裕の肝臓やら心臓やら喉元に赤黒く爛れた深い穴を作るだけだ。

「ねえ、千裕」

涼子の病室の窓越しに、目の前の校舎から学生たちがばらばらと出てゆく姿が見れた。千裕はさっと振り向く。

「どうしたの？」

熱で目を赤くした涼子は口を重たそうにゆっくり開けた。

「病院でたら、洋服買いにいきたい」

涙目の涼子は弱弱しく笑い「ワンピース欲しい」と言った。涼子のベッドの近くに置かれたテーブルの上には一冊の雑誌があった。千裕はその雑誌を手に持って涼し気な空色のワンピースを見た。

「いいと思う。きつと似合うよ」

健康そうな白い手脚がのぞき、モデルは満面の笑みだ。

「ねえ」涼子は少しだけ息を乱している。

「何？」と、千裕。

「自由にしてね」

「え？」

「あたしに縛られないでね」

涼子は千裕から目を逸らして、言葉が続ける。

「あたしたちそんなんじゃないんだから必要以上のことされる覚えもないし、そんなのいらぬ。誰にでもそんなこと言うの？同情してやってくれるの分かってるけど、あたしの命の短さが千裕につまらない責任感を押し付けるようなことはしたくないの」

「同情なんかじゃ…！」

「聞きたくない」

涼子はぴしゃりと言い放ち寝返りを打って千裕に背を向けた。背中越しに彼女は言う。

「あたしのことはいいいから、千裕はいい恋をして、いい仕事をして、どうぞ幸せに」

「そんなこというなよ…」

千裕はそう言ったが、涼子は黙ったまま千裕を見ない。

「なあ。どうしたんだよ。いきなり。今までうまくやってきてたじやんか」

涼子は少しだけ寝相を整える様子を見せるが千裕の言葉には返事をせず「もう寝るから」とだけ言った。

涼子は体調を崩すと別人のように冷たくなるときがあった。このところ千裕によそよそしくはあったが、ここまで突き放されたのは初めてで千裕はどうすればよいのか分からず、傷ついた。

千裕がやり場もなく病室の床のタイルが交差をつくる辺りに目をやっていると、涼子がぼつりと何か呟いたように聞こえた。慌てて何かと尋ねたが涼子は静かに「もう帰って」と言った。それ以上何も

言わなかった。

誰もいなくなつた静かな病室。五十七、五十八、五十九、六十。ぽたりぽたりと、底がまるくなつた小さなケースのなかで栄養満天の雫が落ちるのをそこまで数えてやめた。六十回雫が落ちるのに約二十七秒ほどかかったから一滴が落ちるのにかかる時間はおよそ0・四五秒ほど。ケースの長さは、目分量だけ約三センチほど。一センチにも満たないほどの大きさの雫が三センチ下るのに使う時間は0・四五だから、速さは毎秒六十センチ。あれ、でも落下しているから平均変化速度で求めなきゃダメなのかな。まあ、めんどろ。そう思いながらも涼子はつらつらとメモをとる。数学はたいして好きでないけれど、考えごとを避ける方法で身近なものに数式をあてはめるとというのは結構有効だということを涼子は知っている。だが最近はこの手もあまり役立たなくなってきたようだ。

ふうと一息つくと持っていたペンを置いて涼子は布団のなかで丸くなった。少し熱っぽいけれど不思議と体はよく言うことを聞く。心地よい寝相を捜し求めて寝返りを打つてみるが結局はいつもの寝姿になる。右耳を下に、あご元に手を少しだけ交差するような形だ。ふと指先を見ると爪にはピンクのネイルが施されているままだった。真ん中三本の指は丸い爪先に沿って、歪に少しだけ剥がれてきているのに、親指と小指はよくついたままだった。淡い桜色をしていて少しだけ光沢がある。

「ピンクは似合わないな……」

ぽつりと呟いた。実際は、涼子の指は白く、細かつたから似合わないなんてことはなかった。だが色が似合わないというのは、色が持っている人格をあらわすようなパーソナリティと合わないということを意味するのなら、涼子は似合わないかもしれない。あたしはこんなに可愛い人間じゃない。最前まで男が確かに立っていた辺りをぼんやりと見やりながら、ふと涼子はそう思った。

千裕は、優しい。こんな自分にとてもよくしてくれている。優しい

目をして、素敵な言葉を掛けてくれる。なのに、自分は一体何をしているのだろう。千裕の傷ついた目を思い出した。自分には何も返せるものがない。立派に個展を開けられれば、少しは恩返しができるのかもしれない。けれどこの調子では、絵も描けないあたしは、ごみに近い。ただの役立たずの足手まとい。そこまで考えて、涼子は気だるい体を起き上がらせた。すつとペンをもち、小さなメモ帳に再び長い長い数式を並べだした。窓からひとつ、最終下校を知らせる鐘の音が飛び込んだ。

図書館では、展示室や事務室の整理が急ピッチで進められていた。何人かの頭の固い役員が経費を惜しんで最期まで難色を示したが、ボランティアを募って何とかすること、中央には一切迷惑をかけるいことを約束すると、よしきたと言わんばかりに去っていったのだ。分室に置かれていた本を本館に引き取るとなると、収納スペースにも限りが出てきた。そこで、貸し出し数の少ない本を好きなだけ各家庭に引き取ってもらおうキャンペーンも実施されることになった。たったの二週間ほどであったが、意外にも反響を呼んで図書館の来訪者も多くなった。時には小さな町や村の役員が訪れて蔵書数が少ないのもらっていつてよいか、と言って引き取ってくれたので計画はますます軌道に乗っていった。

季節が暖かさを伴うと共に涼子も回復し、退院も目前となった。涼子は服が買いにいけると喜び元気そうだった。図書館での様子を聞くよりもりいつそう喜んだ。

すべてが順調だった。このままでいい、とさえ思った。

「こんなこと始めてだわ」

もつともらしい手袋をはめてショーケースの移動に取り掛かる千裕に藤原さんは言った。

「というと？」

「個人のための展覧会に館長が協力するなんて」

「そうなんですか？」

いつも穏やか顔の男を思い浮かべたが、今回の件が意外だとは思えずその言葉に驚いた。

「館長つて何者ですか？」

「不思議な人よね。でもすごい人なのよ。前の館長がいきなり引退してね、そのすぐ後に着いたのが今の館長なんだけど、図書館の利用者数も大谷館長になってから徐々にだけ随分増えたのよ。でも個展を開いたことは一度もなかったわ」

へえ、とひとつ頷くと藤原さんは「どうしてかしらね」と首を傾げた。

言われてみれば不思議だった。館長は涼子の絵など見たことがないはずだ。作品も見たことがないというのに、二十にも満たない名もない女をここまでして支援するだろうか。確かに涼子は病気だが、館長は人倫に突き動かされるだけの人間でもなさそうだった。はじめに研究員が語った「図書館でやる意味がわからない」という意見の方が随分妥当のように思った。

（私欲なくして動く人間などいないさ）

ふとそんな言葉を思い出したが、藤原さんがいつもの調子に戻り千裕を急かしたので、心の底で「大谷って言うのか」とひとり承知するだけにして千裕は仕事へと戻っていった。

涼子の退院が決まった。朝早くに病院へ向かえに行き、その足で都心へ行くことにした。涼子が以前からどこへ行きたいかは決めていたようで、図書館の休みも限られていたのでそのまま買物に行きたいと言ったのだ。とはいえ、千裕は免許をもつてはいたが、車を持っていなかった。交通手段に困った。涼子の体を思うと、電車で連れ出すことも気が引けたが、涼子は構わないからと言って聞かない。だが渋々ラッシュ時を避けて駅へ行ってみると、平日の月曜日だということもあって、ホームに人気は少なく程なく到着した電車の中もガラんとした様子であった。

「遠出なんて久しぶり」ガタンガタンとリズムよく鳴く電車に揺られて涼子は言った。

「ほんとに大丈夫？」向かい合つて四人がけとなる一角を避けて、窓を左側にした二人がけの椅子の通路側に座った千裕が不安げに言う。

「大丈夫よ。天気も気持ちいいし、体調もいいんだから」

そう言つて涼子にはこつと笑つた。

「ちゃんと場所分かつてる？地図持つてるの？」

「分かつてるわよ。多分」

そう言つて涼子のかばんの中からごそごそと小さな地図を広げだした。千裕はそれを目の端でしっかりと捕らえながらも、「じゃあ涼子に任せるよ？」と言つた。涼子は大きく満足げに頷いて再びごそごそとかばんの中を整理しだした。

電車は短いトンネルに入つていった。トンネルの中の黄色いライト

が連なつて窓の外に一本のラインのように柵引いていた。ラインの淵にぼんやりとレモン色の淡い光がまとう。しばらくすると、千裕の耳につんとした刺激が走ったが、トンネルを渡り終わると、さつと景色は変わり青い青い空が見えた。

「いい天気だね。お花見でも良かったんじゃない」きゅつと耳を押さえた千裕が尋ねた。

「そっか。もうそんな季節なんだね。でもまだちょっと早いんじゃないかしら」

「時間あつたらどこか寄つてみようか」

涼子は少し考える様子を見せて「いいの?」と言った。

「いいの?つて何?いいよ。行こうよ」

「…うん」

その間合い何?と、千裕は思った。そのほんの小さな沈黙が、どんなに感情的な言葉よりも現実を語る。大の男が、そこにどうしようもない距離感を覚えて、勝手に傷つく。ふうと小さくため息をついた千裕に「川沿いとか綺麗かもね」という平坦な言葉がとんだ。ガタンガタンと車輪の音が千裕の耳を打った。

程なくして目的の駅に着いて人の流れに乗って出た。駅の周辺は、高層のビルが互いに競うかのように立ち並ぶ。真っ白な真昼の太陽がビルの間からのぞき、ビルは思い思いに反射させていた。どんなものにも温かみというものは見つかるものだが、どうしてビルはこゝも素っ気ないものなのだろう。都会が作ったたくさんの歪な太陽をいまいまいげに見つめながら、案の定道に迷う涼子をひっぱって歩いた。

「ああ。そうそう。ここ!」いくつかそういったやりとりを繰り返して、何軒かの店に回った。雰囲気の良い店や、期待はずれの店もいくつかあつて涼子はそのたびに一喜一憂していた。

「涼子疲れない?」

「ぜんぜん平気よ?」

女の力の発揮所というのはいまいち掴みづらい。買い物と、化粧とメールにどうしてそんなに執念がわくのだろう。ああ、あとスイーッと。

「千裕は、女の子の荷物を持つ人？」　ぷらぷらと通りを歩く涼子は尋ねた。

「重そうじゃなかったら持たない人かな」

素直に答えた。ダンボール箱を持つのと紙袋ひとつを持つのでは絶対に目的が違う。前者は優しさ、後者は下心だ。と千裕は思っているが、

「…持ったほうがいいの？」

涼子の右手に揺れている小さな髪袋がちらちらと視界に入っていた。涼子はびっくりしたように首をふって「違う違う」と笑い、前の方を指差した。そこには三十メートルほど離れたところにカップルがいた。男の肩には大小様々のピンクやら白やら、可愛らしい荷物がずらりと並んでいた。

「あれはすごいなと思って」

千裕はふつと笑って「いろんな人がいるんだな」と当たり障りのないことを言った。涼子もびっくりしたようなおかしきような顔をしていたが、やがて「あたしはあまり持つてほしくない人かな」と言った。

信号の手前、賑やかな大通りを右に曲がると、カップルはどこかの店に入ってしまったのだろう。もういなくなっていた。少し歩いたところで、涼子もまたインテリアやらアロマを扱う雑貨屋に入ってしまった。しばらくは一緒にいたが、アロマの匂いに気分が悪くなってきた。情けなくも千裕はふらふらと店を出て、すぐ近くにあったベンチに座っていた。

（胸焼けしそう）

胸を軽く叩きながら、ぼんやりと行き交う人たちを見ていた。中途半端に大人ぶった中学生や、作られたような顔をした女もいれば、爽やかそうな男女、年齢不肖なおばさんもいろんな人がいた。その

中で、自分が涼子という存在と今、ともにいることを思ってみた。運命だとか必然だとかそんなことは思いもしなかったが、あいつでも、そいつでも誰でもなく涼子であることが、すごいと思った。こんなことをしていいのだろうか、と思う半分、こんな穏やかな時間が愛しかった。こうしていると、涼子が死んでしまうなんて信じられなかった。

涼子の死に素直に目をそむけてられる時間が千裕には大切だった。涼子が入院していたときは、毎晩寝られなかった。今この瞬間にでも涼子が息を引き取るのではないのだろうかと考えたときにめまいがした。携帯が音を立てるたびに怖かった。涼子の死を思うと、心臓が鷲津かまれたようにきゅうつと痛み、自分もそのまま死んでしまいそうだった。

ただ、こうして目を閉じている間に涼子の死を忘れていられるのもほんのわずかだった。好きになればなるほど、不安は募る、不在が気になる。ふいにいなくなってしまうのではないかと悪い予感に掻き立てられる。それでも、涼子を好きでいることはやめられなかった。不安で胸がつまりそうなのに、心の底からやめようとは思えなかった。こんなに切ないのに、単純に、涼子を好きな自分が嬉しかった。以前までは、涼子を好きであることを認めるのが辛かったのに、今度はそれは愛じゃないんだよと言われることが辛かった。好きだという気持ちか否定されることは、自分のすべてが否定されているようだった。

カツカツカツカツ…おしゃれな店の立ち並ぶ大通りでは、いくつものヒールの音が四分の一拍子を刻む。ふと、男と目が合った、同じ歳くらいの、若く、背のひよる長い男。むこうの男もいぶかしむようにじつと見据えた。互いの口が何かの合図のようにあつと開いた。

「千裕っ…!？」

「桐島…!？」

互いが互いの名を呼び、互いが自身の名を聞くと、二人は笑い出し、桐島と呼ばれた男が通りを横切つて千裕のベンチの方へとやってき

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8241d/>

星月夜

2010年10月8日15時05分発行